

ここ十数年の間、放射線遮蔽に関する体系的な書籍が発刊され、環境は改善されつつあったが、放射線遮蔽の基礎から実際の計算、設計までを網羅し最新の情報を盛り込んだ本書は、実用書としてはもちろん、知的アーカイブとしても重要な成果と思う。本書の利用を広くお勧めするとともに、基礎編に続く内容にも期待したい。

(馬場 護 東北大学名誉教授)

(ISBN978-4-89047-161-4, A4判 369頁, 定価本体5,000円, 日本原子力学会, ☎03-3508-1261, 2015年)

放射線被曝の理科・社会

児玉一八, 清水修二, 野口邦和 著



本書は、特徴的なタイトルに示されるように、福島第一原子力発電所事故による放射線被曝の問題を自然科学的・社会的の両側面から論じたものである。著者は、福島での現在の問題は、放射線被曝に関する世論の分裂にあることを指摘し

ており、放射線被曝による被害の問題は生物学や医学の問題であるが、被害の評価には社会科学的な価値判断が入ってくるため、両側面から解明することである。本書の主張は、以下の2点であることが緒言に示されている。1つは、“福島第一原子力発電所事故による放射線被曝の影響の大小と、原発の是非とは別問題”であり、もう1つは、“低線量放射線による人体影響には分かっていることもたくさんあり、それを何も分かっていないことにするのは事態を混迷させるだけ”である。

内容を見ていくと、1章では「低線量被曝をめぐる論争を検証する」として低線量域では確率的影響の評価ができないため中高線量域からの外挿によって行わざるを得ず、放射線防護ではLNT仮説を用

いたリスク評価を行っていることや、内部被曝と外部被曝、 β 線と γ 線におけるリスクには、同じSvであれば差がないことなどが自然科学的根拠とともに示されている。

2章では『『福島は住めない』のか』として、昨年世間の話題となった、漫画「美味しんぼ」で事故後の福島第一原子力発電所を視察した主人公が鼻血を出す描写に対する自然科学的反論がなされている。また、「福島県民は全員県外避難すべき」という原作者の主張に対しても自然科学的根拠がある反論がなされている。

3章では『『福島の食品は危ない』のか』として、チェルノブイリ原発事故と福島第一原子力発電所事故との違いを踏まえ、食の安全確保のための規制値の決定方法や、検査態勢とその結果がまとめられている。また、福島県民が放射性Csを食品としてどれだけ取り込んでいるのかを実際に流通している食品における陰膳調査による実測値に基づき安全性が担保されていることを述べた上で、安全な食のための方策が検討されている。

4章では「福島の今とこれから」として福島県の現状と今後、県民健康診断に関する問題が、5章では「原発住民運動と放射線問題」として、原発からの脱却、科学者の役割や責任について論じられている。これらの2章は社会科学的な議論で構成されている。

いずれの章においても、科学的な根拠が示され、整合性のある論理展開に基づいた説得力のある内容となっていることが本誌読者ならば容易に理解できることだろう。一読をお勧めしたい。

筆者は、「美味しんぼ」を約30年前の小学生の頃から読んでおり、単行本も全111巻を全て揃えている。原作者が漫画中で政治的な主張を行うことは承知しているし、それが面白さの一部であると理解している。とはいえ、科学的に誤った考えを根拠に主張するのはいかがなものかと考えていた。本書には「美味しんぼ」の問題に対する自然科学的な反論が整理された一面もある。

(松垣正吾 東京大学アイソトープ総合センター)

(ISBN978-4-7803-0743-6, A5判 192頁, 定価本体2,000円, かもがわ出版, ☎075-432-2868, 2014年)